

令和 7 年 5 月 30 日
水管理・国土保全局河川環境課

川は“生き物の宝庫” 気候変動や外来生物の影響も ～河川水辺の国勢調査 34 年の成果を分析～

国土交通省は、平成 2 年度から「河川水辺の国勢調査」を実施しています。

このたび、最新（令和 5 年度）の調査結果をこれまでのデータとあわせて分析し、特徴をとりまとめましたのでお知らせします。

今回の分析により、日本の生物多様性を支える河川の重要性や、気候変動・外来生物の影響等が明らかになりました。

- 国土交通省では、河川環境の整備と保全を適切に推進するため、河川・ダムにおける生物相を定期的、継続的、統一的に把握することを目的として、平成 2 年（1990 年）度より「河川水辺の国勢調査」を実施しています。

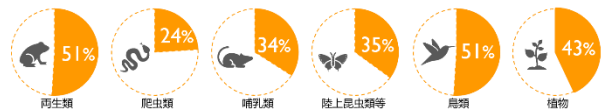
本調査は、全国すべての一級河川の国管理区間を主な対象としており、これまでの 34 年間で約 4000 調査※を実施しています。 ※河川のみ。ダムの調査結果は別途取りまとめ予定。

- これまでの調査結果から生物相の変化傾向を分析し、特徴をとりまとめました。

川は“野生生物の宝庫”

最新調査では、「日本産野生生物目録」等に掲載されている動植物の約 2～5 割が確認※されました。 ※魚類・底生動物は対象外

日本各地の川が、生物多様性を支える重要な“生き物のゆりかご”であることが、改めて浮き彫りになりました。



“草地の住人”カヤネズミが伝える、自然度の高さ

草地をすみかとするカヤネズミは、自然度の指標となる生き物です。

これまでの調査で継続的な生息が確認され、**確認地区が拡大**していました。

生物の生息場となる河川環境が適切に管理・維持されていると考えられます。



気候変動や外来生物の影響も川にあらわれる

温暖な汽水域を好む魚「**テングヨウジ**」は、**分布の北上傾向**が見られました。

特定外来生物「**アライグマ**」は、**分布の拡大傾向**が見られました。

気候変動や外来生物の影響が河川にあらわれているといえます。



とりまとめ（抜粋）

- 分析結果の詳細については別紙をご参照ください。
- 今後は、各河川においても経年的な整理・分析を行い、河川整備基本方針の検討や、河川整備計画における定量的な目標の検討に活用するなど、河川管理に一層活かしてまいります。

* 令和 5 年度の調査結果の概要については、河川環境データベースをご覧ください。

<https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokuweb/download/R05.htm>

<問合せ先>

水管理・国土保全局 河川環境課 鶴田、安達

TEL：03-5253-8111（内線 35434、35444）、03-5253-8447（直通）

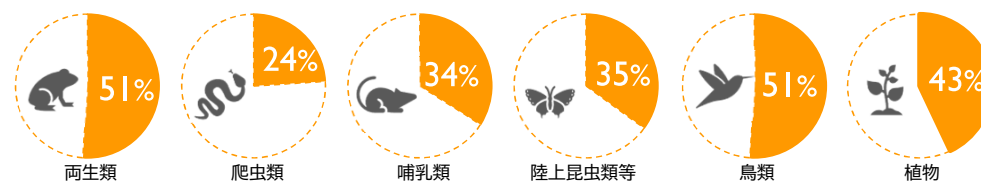


全国の一級河川で実施している「河川水辺の国勢調査」によって、川に生きるさまざまな動植物の姿を記録し続けてきました。このたび、最新結果をこれまでの調査データとあわせて分析したところ、**日本の生物多様性を支える河川の重要性や気候変動・外来生物の影響など、自然の“今”を映し出すさまざまな変化**が明らかになりました。

川は“野生生物の宝庫”

最新調査では、「日本産野生生物目録」等に掲載されている動植物の**約2～5割が確認※**されました。 ※魚類・底生動物は対象外

日本各地の川が、生物多様性を支える重要な“生き物のゆりかご”であることが、改めて浮き彫りになりました。



“草地の住人”カヤネズミが伝える、自然度の高さ

草地をすみかとするカヤネズミは、自然度の指標となる生き物です。

これまでの調査で継続的な生息が確認され、**確認地区が拡大**していました。

生物の生息場となる河川環境が適切に管理・維持されていると考えられます。



カヤネズミ

気候変動や外来生物の影響も川にあらわれる

温暖な汽水域を好む魚「**テングヨウジ**」は、**分布の北上傾向**が見られました。

特定外来生物「アライグマ」は、**分布の拡大傾向**が見られました。

気候変動や外来生物の影響が河川にあらわれているといえます。



テングヨウジ

川に暮らす生き物たちを定期的、継続的、統一的に調べることで、私たちは環境の変化をとらえることができます

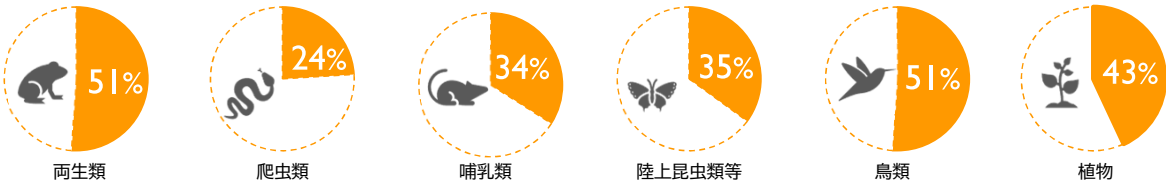
今後も河川を通じて、自然の変化や社会との関わりを科学的に捉え、持続可能な河川管理に活かしていきます

- 国土交通省では、河川環境の整備と保全を適切に推進するため、河川における生物相を**定期的、継続的、統一的**に把握することを目的として、**平成2年(1990年)度より**河川における生物調査等を行う「河川水辺の国勢調査」を実施しています
- 本調査は、全国すべての一級河川(109水系)を対象としており、これまでの**34年間で約4000調査を実施**、河川における生物相の基礎データを体系的に取得してきました

全国の一級河川における最新の調査において、「日本産野生生物目録」等掲載種のうち、**鳥類、両生類は約半数、植物は約4割の種数が確認**されています。

河川区域は、水域や水辺の草地や樹林地などの空間を様々な生物が利用しており、**日本の生物多様性にとって重要な場**となっています。

全国の一級河川(109水系123河川)の最新調査※における確認種数／野生生物種数に占める割合



全国の一級河川の最新調査※における確認種数

※「最新調査」とは、R5年度までの期間において、各河川の最新調査結果を集計したものです。

調査項目	①確認種数	②「日本産野生生物目録」等※1掲載種数	確認率 ①/②	重要種数 ※3	在来種数 (重要種以外)	外来種数 ※3
両生類	30	59	51%	12	17	1
爬虫類	21	87	24%	4	15	2
哺乳類	63	188	34%	16	35	12
陸上昆虫类等	9,585	27,098	35%	215	9,236	134
鳥類	342	676	51%	75	251	16
植物	3,520	8,118	43%	230	2,385	905
魚類	428	200	— ※2	134	264	30
底生動物	1,617	—	— ※2	232※	1,346	40※

※ 1種が重要種と外来種の双方に含まれる。

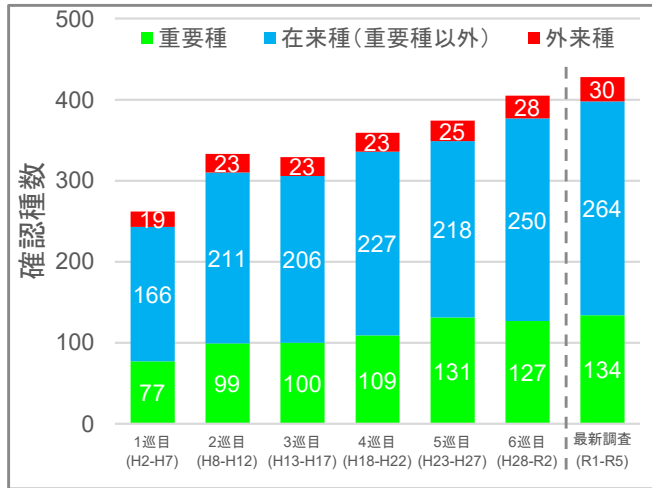
※1. 陸上昆虫类等：「河川水辺の国勢調査生物リスト」において、陸上昆虫类等調査の調査対象としている分類群に含まれる種数を示しています。
鳥類：日本産野生生物目録よりも新しい情報として「日本産鳥類目録改訂第7版、2012」に掲載されている種数を示しています。
植物：「植物目録 1987（環境庁自然保護局編）」に掲載されている種数を示しています。

※2. 魚類・底生動物については、日本産野生生物目録に掲載されていない種・分類群も調査していることから、確認率を算出していません。

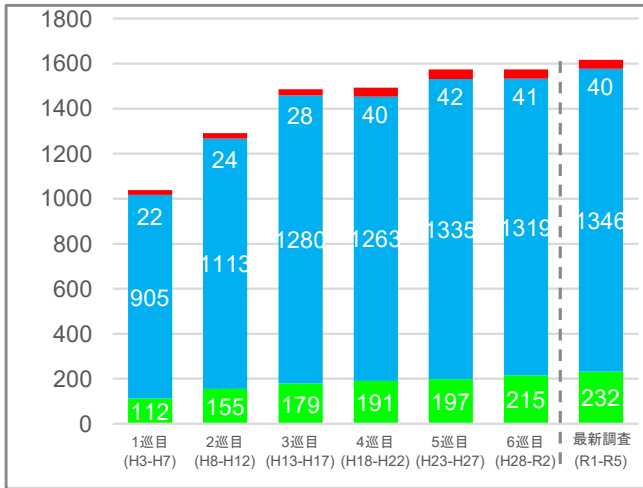
※3. 本調査における重要種、外来種の定義については、「令和5年度河川水辺の国勢調査結果の概要〔河川版〕（生物調査編）令和7年3月」をご参照下さい。
<https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokuweb/download/pdf/gaiyo/R05/R5-100gaiyou.pdf>

これまでの河川水辺の国勢調査では、水域やその周辺の河川空間を利用する**多くの生物が継続的に確認**されています。

魚類

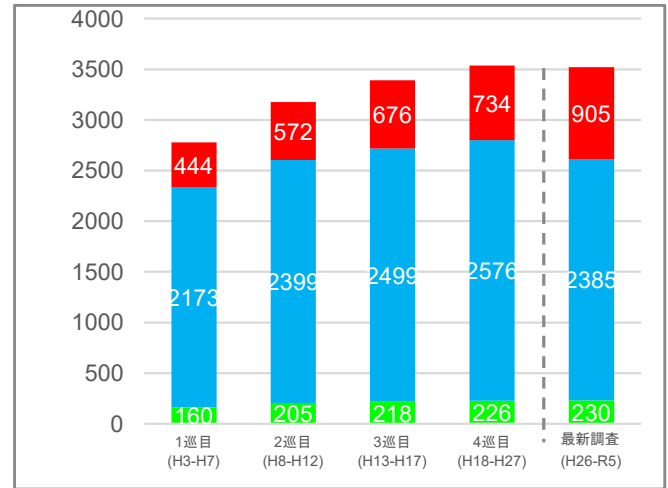


底生動物

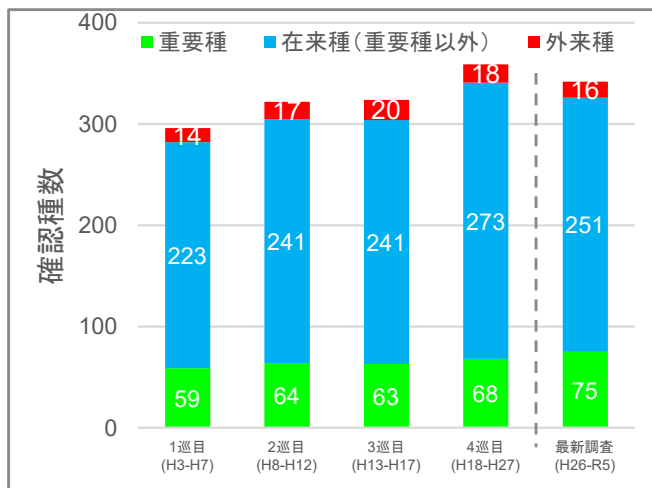


※1種が重要種と外来種の双方に含まれる。

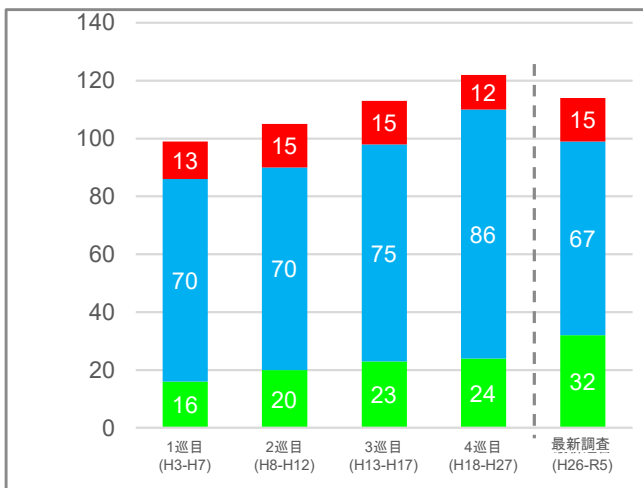
植物



鳥類

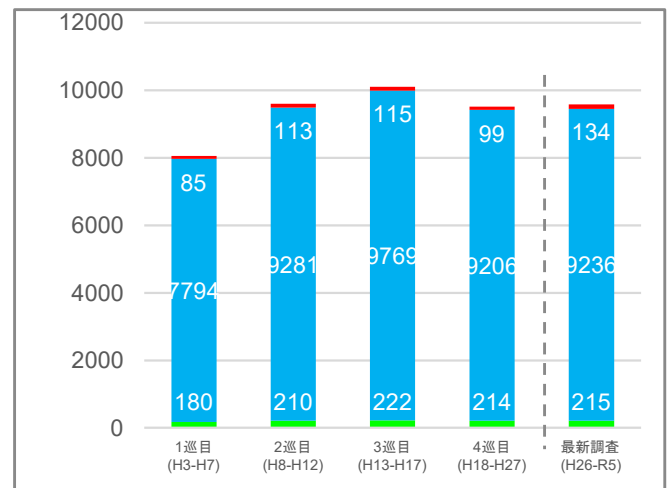


両生類・爬虫類・哺乳類



※最新調査で減少した要因として、準拠する生物リストの変更がある。

陸上昆虫類等



※4巡目で減少した要因として、調査方法の変更(カーテン法の削減)、調査対象タケサの絞込みがある。

※H18年度以降は、植物、鳥類、両生類・爬虫類・哺乳類、陸上昆虫類等は10年に1回の調査頻度になりました。

※準拠する生物リスト、重要種・外来種の選定基準は最新調査と以前の巡目で異なります。

※「最新調査」とは、R5年度までの期間において、各河川の最新調査結果を集計したものです。

良好な草地環境をすみかとするカヤネズミは、河川の自然度の指標となる生き物です。
これまでの調査で継続的な生息が確認され、**確認地区が拡大**していました。

カヤネズミは、オギやヨシなどの草地に巣をつくる、日本で最小クラスのスズミです。自然分布域は宮城県・新潟県以南に広がります※。

令和5年度は、調査対象26河川(自然分布域内24河川)のうち、**五ヶ瀬川**
など21河川で確認されました。平成28年以降の調査では、**自然分布域内**
の河川の約9割、調査地区の約6割で確認されています。

オギ・ヨシは全国の河川で広く見られ、多くの生き物の生息場となっています。この**水辺の草地環境は、経年的に維持**されています。

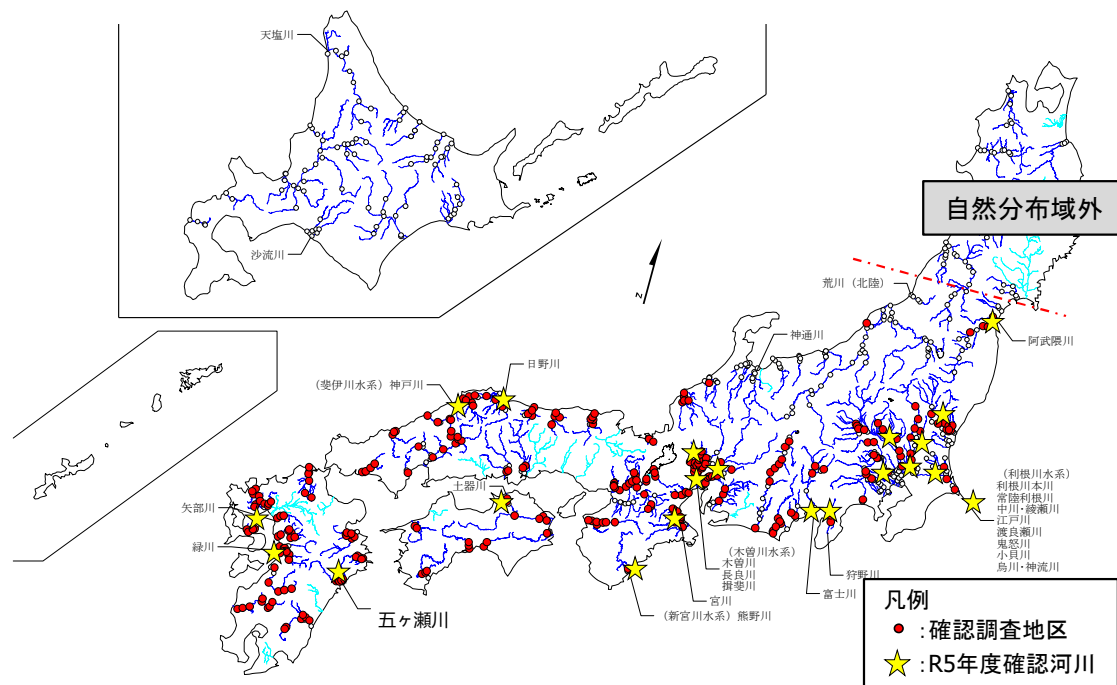
※「日本の哺乳類 改訂第2版(2008)」によれば、「本州の太平洋側では宮城県以南、日本海側では新潟県・石川県以南、および九州、四国、隠岐諸島(島後、西ノ島、中ノ島)、淡路島、豊島、因島・大崎上島、対馬、天草下島、福江島、口之永良部島などに分布」とされています。



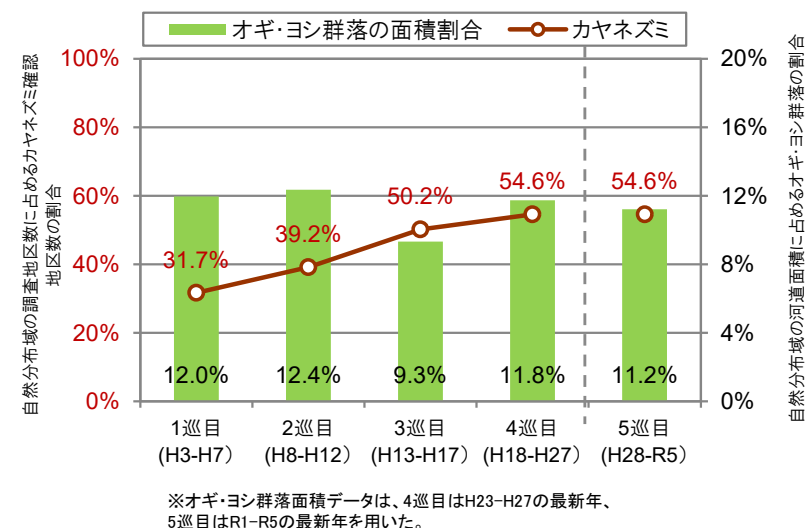
カヤネズミ生息環境(五ヶ瀬川)



カヤネズミ (五ヶ瀬川 R6.2.20)



カヤネズミが確認された調査地区(5巡目調査)



カヤネズミの確認状況とオギ・ヨシ群落面積の推移

砂礫(されき)河原に巣を作るコチドリやイカルチドリも、河川の自然度の指標となる生き物です。
ほとんどの河川で継続的に生息が確認されています。

コチドリは、川の中流から下流の砂礫河原や、海岸の砂丘、埋立地などに巣をつくります。令和5年度の調査では、調査対象16河川のうち、**旭川など14河川で確認**されました。

イカルチドリは、上流の河原や氾濫原の礫(れき)の多いところに営巣します。同じく16河川のうち**庄内川など13河川で確認**されています。

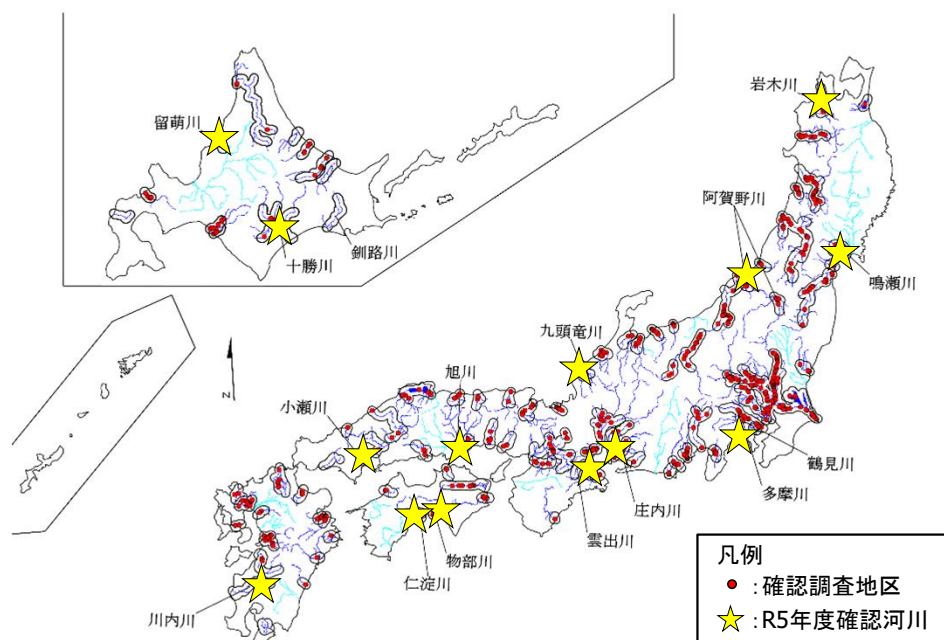
砂洲や礫河原を含む自然裸地は、川の自然な姿を表す重要な環境のひとつです。出水などの影響を受けて面積が大きく変わるため、定期的な調査が必要です。



コチドリ (旭川 R5. 4. 28)

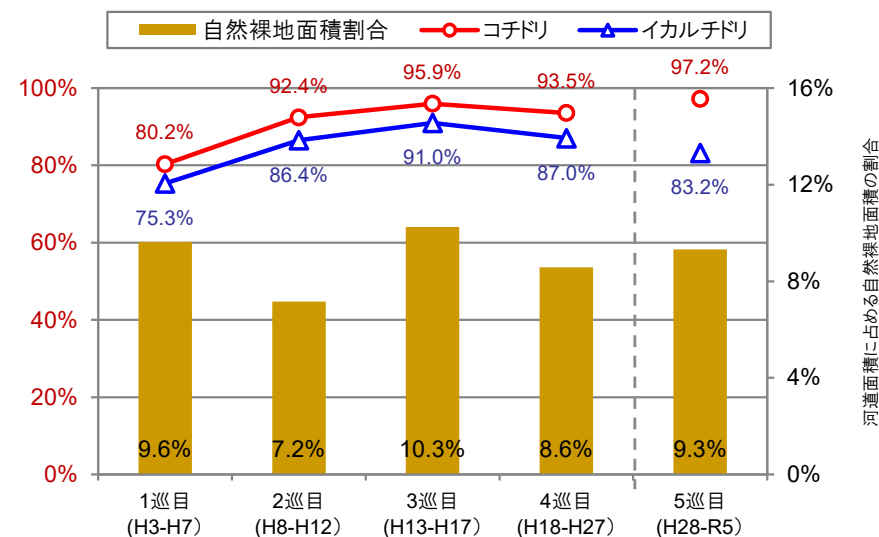


イカルチドリ (庄内川 R5. 9. 25)



コチドリが確認された調査スポット(5巡目調査)

調査河川全体に占めるコチドリ・イカルチドリ確認河川の割合



※自然裸地面積データは、4巡目はH23-H27の最新年、5巡目はR1-R5の最新年を用いた。

コチドリ・イカルチドリの確認状況と自然裸地面積の推移

川の水辺の樹林(河畔林)を好むチョウ類が
多くの河川で継続的に確認されています。

オオムラサキやゴマダラチョウの幼虫は、河畔林の代表種であるエノキの葉を食べます。また、コムラサキの幼虫はヤナギ類を、ミドリシジミの幼虫はハンノキの葉を食べます。これらのチョウの生息状況から、河畔林の発達や分布の状態を知ることができます。

ヤナギやハンノキなどの河畔林は、魚の生息場や、サギなどの鳥の休息・巣作りの場、また昆虫類の暮らしの場にもなっており、川の生態系にとって欠かせない存在です。

ただし、樹林が生い茂りすぎると、礫河原など別の生息場の減少や、川の流れに影響する場合があるため、注意が必要です。



オオムラサキ (天竜川 H30. 7. 19)



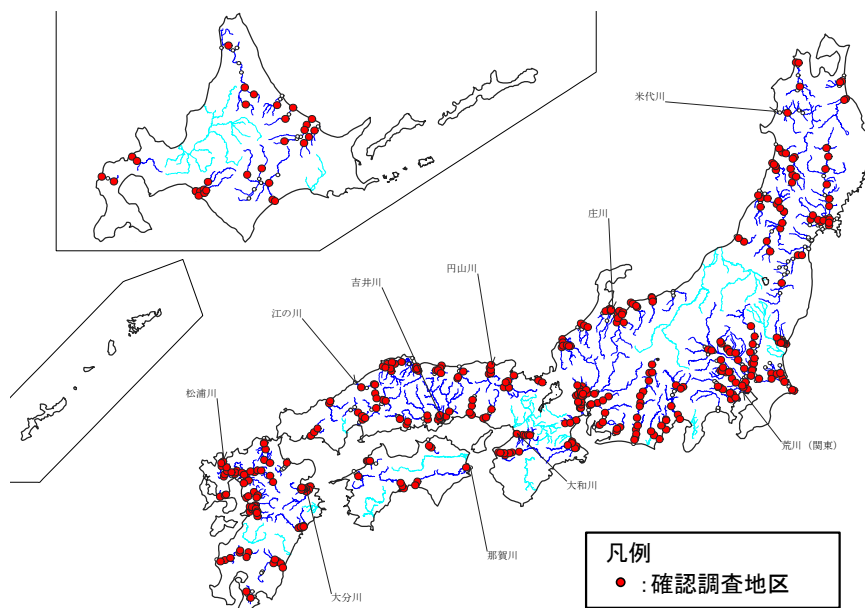
ゴマダラチョウ (中川・綾瀬川 R4. 5. 12)



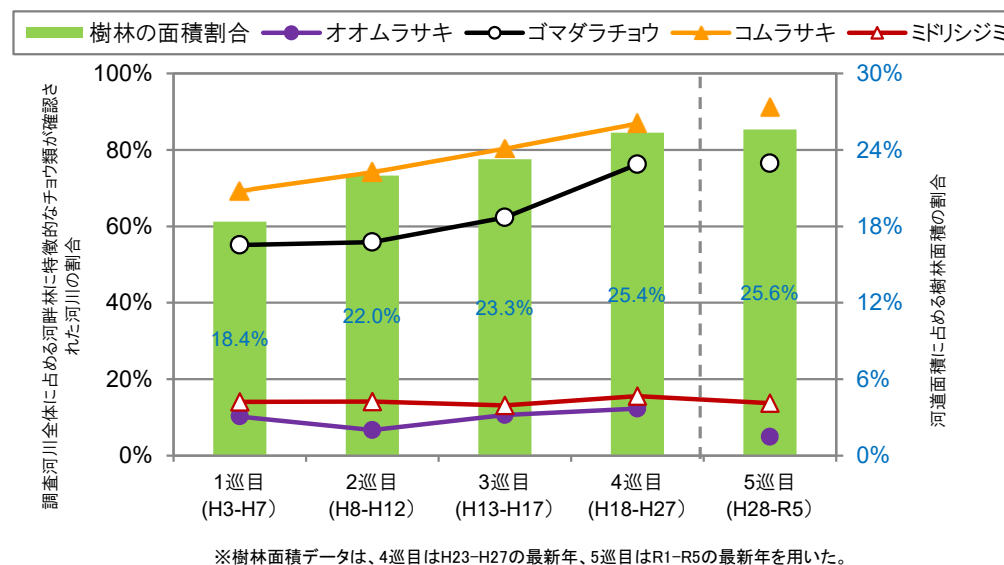
コムラサキ (大和川 R5. 9. 26)



ミドリシジミ (尻別川 R1. 7. 12)



河畔林に特徴的なチョウ類が確認された調査地区(5巡目調査)



チョウ類4種の確認状況と樹林面積の推移

西日本を中心に分布していた温暖な汽水域の魚「テングヨウジ」。
最近ではその姿が、**より北の河川でも見られるようになっていきます。**

テングヨウジは細長い体が特徴的な魚で、流れのゆるやかな汽水域や河口部に生息します。水中の枯れ木や水草の中にじっと隠れており、見つけにくい魚でもあります。

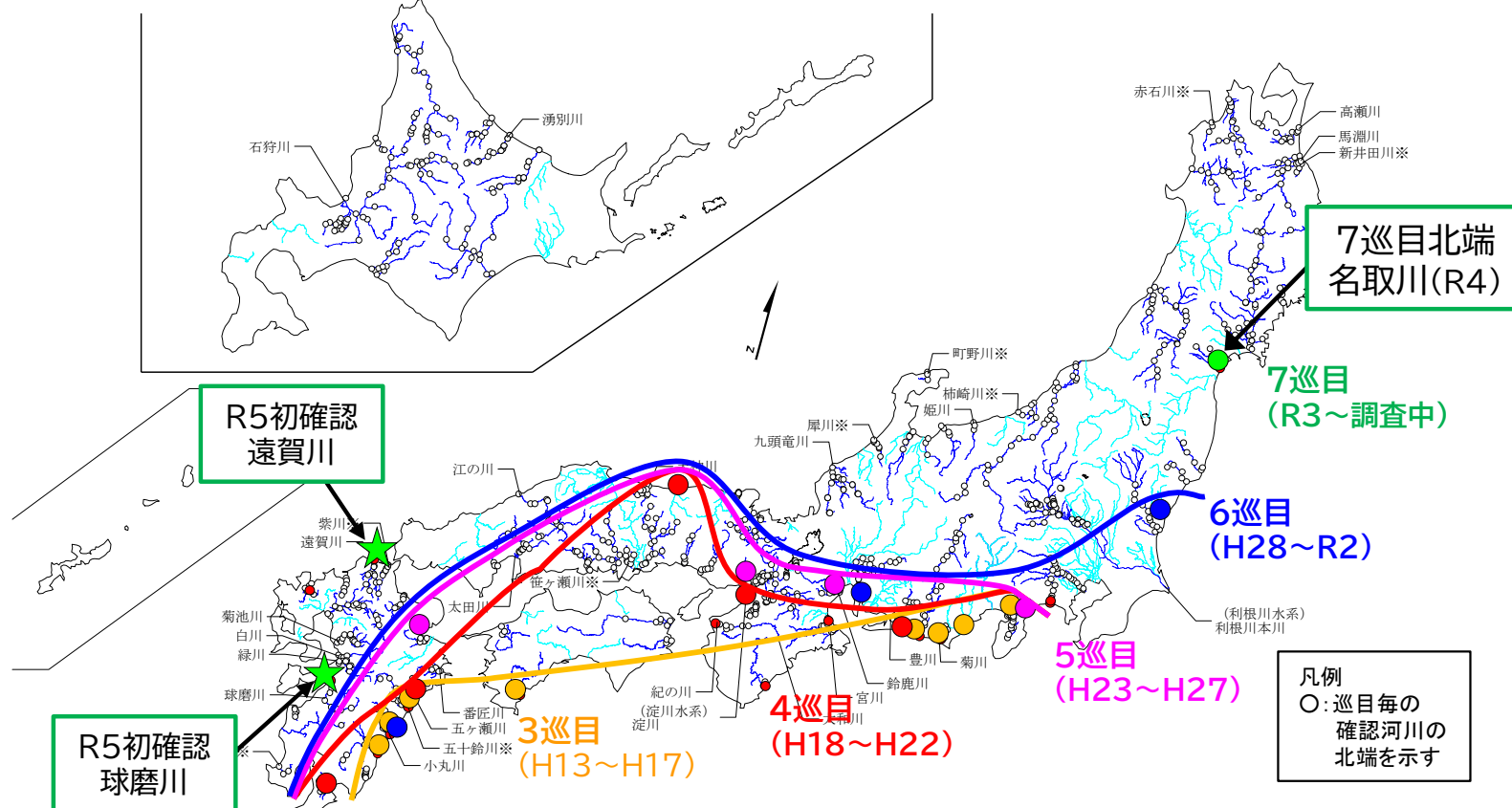
令和5年度の調査では、遠賀川や球磨川など4河川で確認されました。また、令和4年には、東北地方の名取川で初めて確認され、太平洋側でも分布の北上がみられています※。

気候変動の影響が、魚類の生息域にもあらわれているといえます。

※ 分布域について、「日本産 魚類検索 全種の同定第三版(2013)」によれば、「相模湾～種子島の太平洋沿岸」とされていましたが、近年の「河川水辺の国勢調査」以外の調査においても、東北地方(宮城県)で確認されたとの報告があります。(旗(2020) 伊豆沼内沼研究報告 14:69-80)



テングヨウジ (紀の川 R5.10.25)



テングヨウジの分布北端の経年的な状況

スマレ類を好む暖地性のチョウ「ツマグロヒョウモン」。
その姿が、近年では北日本や東日本の河川でも目立つようになってきました。

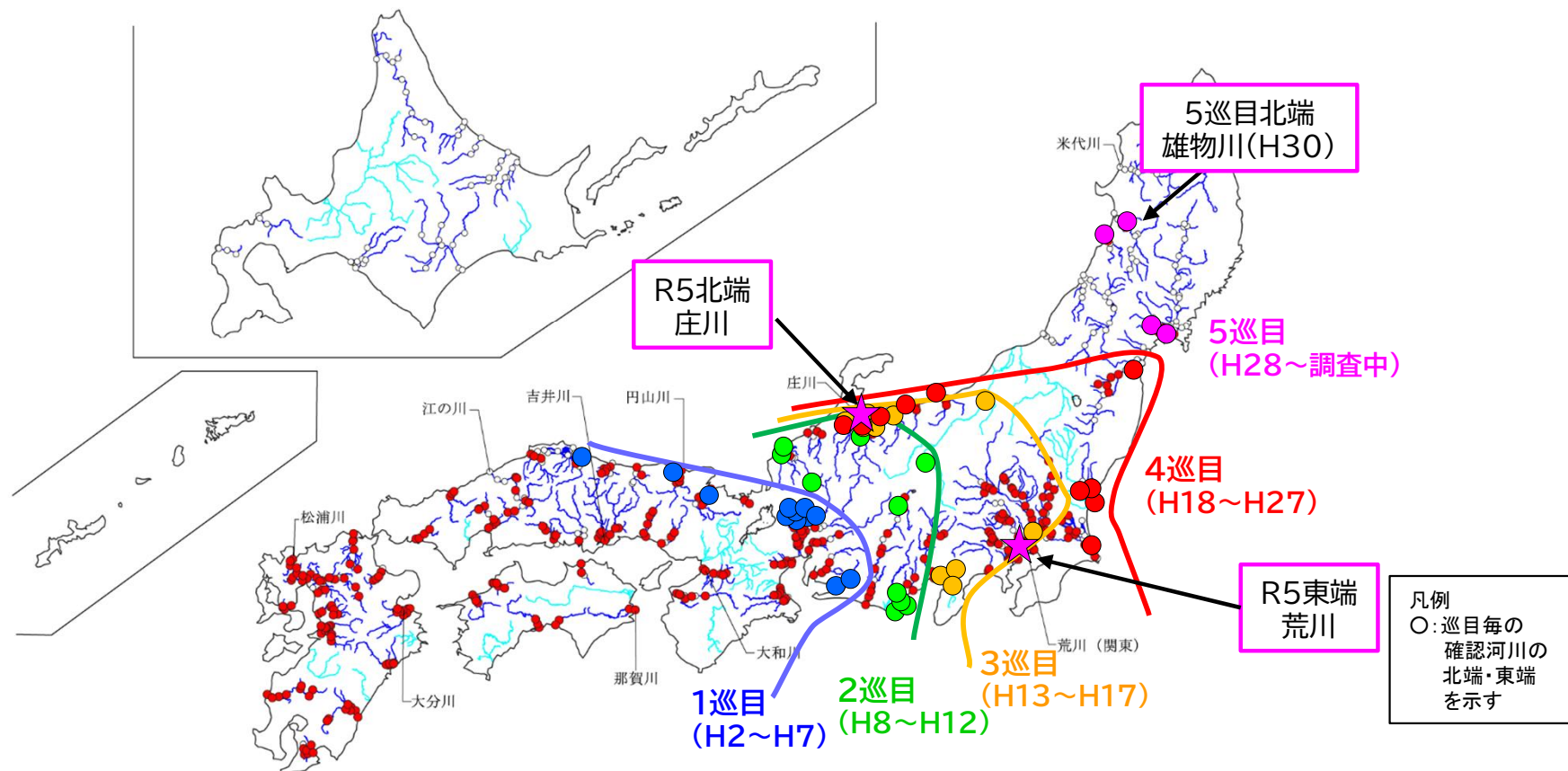
ツマグロヒョウモンはオレンジ色と黒のコントラストが美しいチョウです。幼虫は、パンジーやスマレなどを食べます。市街地にも現れることがあり、身近な環境の変化を感じさせてくれる存在です。

これまでの調査から、北進・東進の傾向が継続的に確認されています。令和5年度の調査では、調査対象10河川のうち荒川など9河川で確認されています。

気温の上昇にともなって、生息域が拡大していると考えられます。



ツマグロヒョウモン（鶴見川 H30. 10. 15）



ツマグロヒョウモンの分布東端北端の経年的な状況

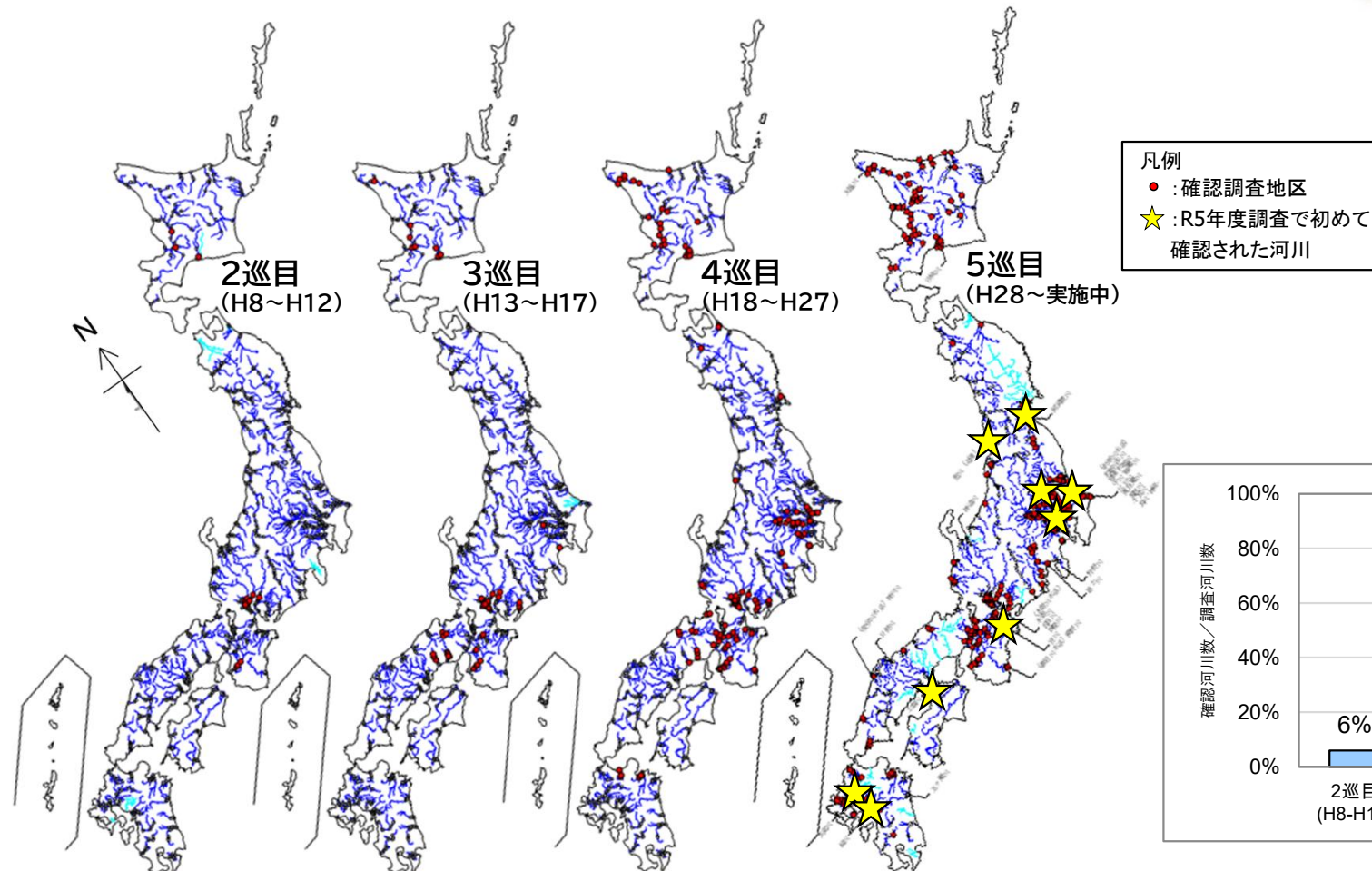
北米原産のアライグマが、日本各地の河川でも確認されるようになり、**拡大傾向**です。

アライグマは雑食性で、農作物への被害だけでなく、鳥の卵やヒナ、小動物など在来の動物への被害も懸念されています。特定外来生物に指定されています※。 ※ もともと日本にいなかった外来生物のうち、生態系などに被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれのあるものの中から指定。飼育・栽培・保管・運搬・販売・輸入などが原則として禁止。

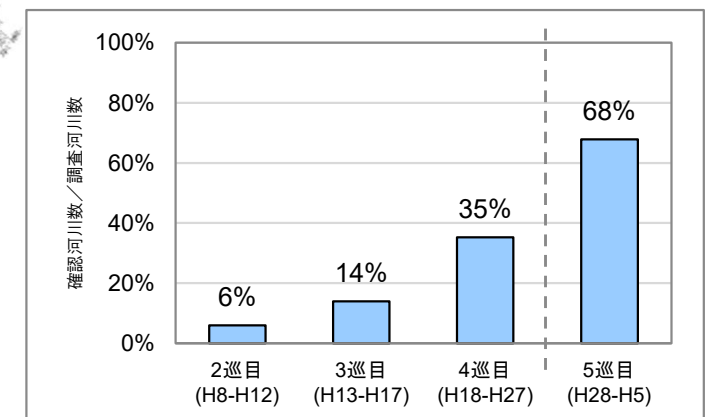
令和5年度の調査では、調査対象26河川のうち22河川でアライグマの存在が確認されました。うち9河川では初めての確認となり、**河川空間での分布拡大傾向が顕著**になっています。



アライグマ (大分県 R4.5.17)



アライグマの経年的な確認状況

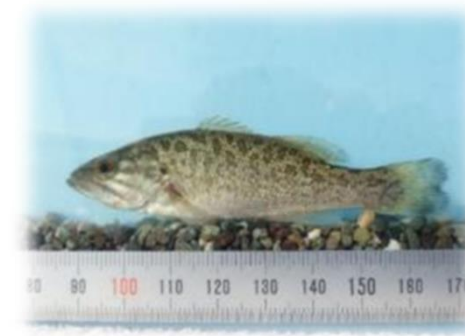


アライグマの確認状況の推移

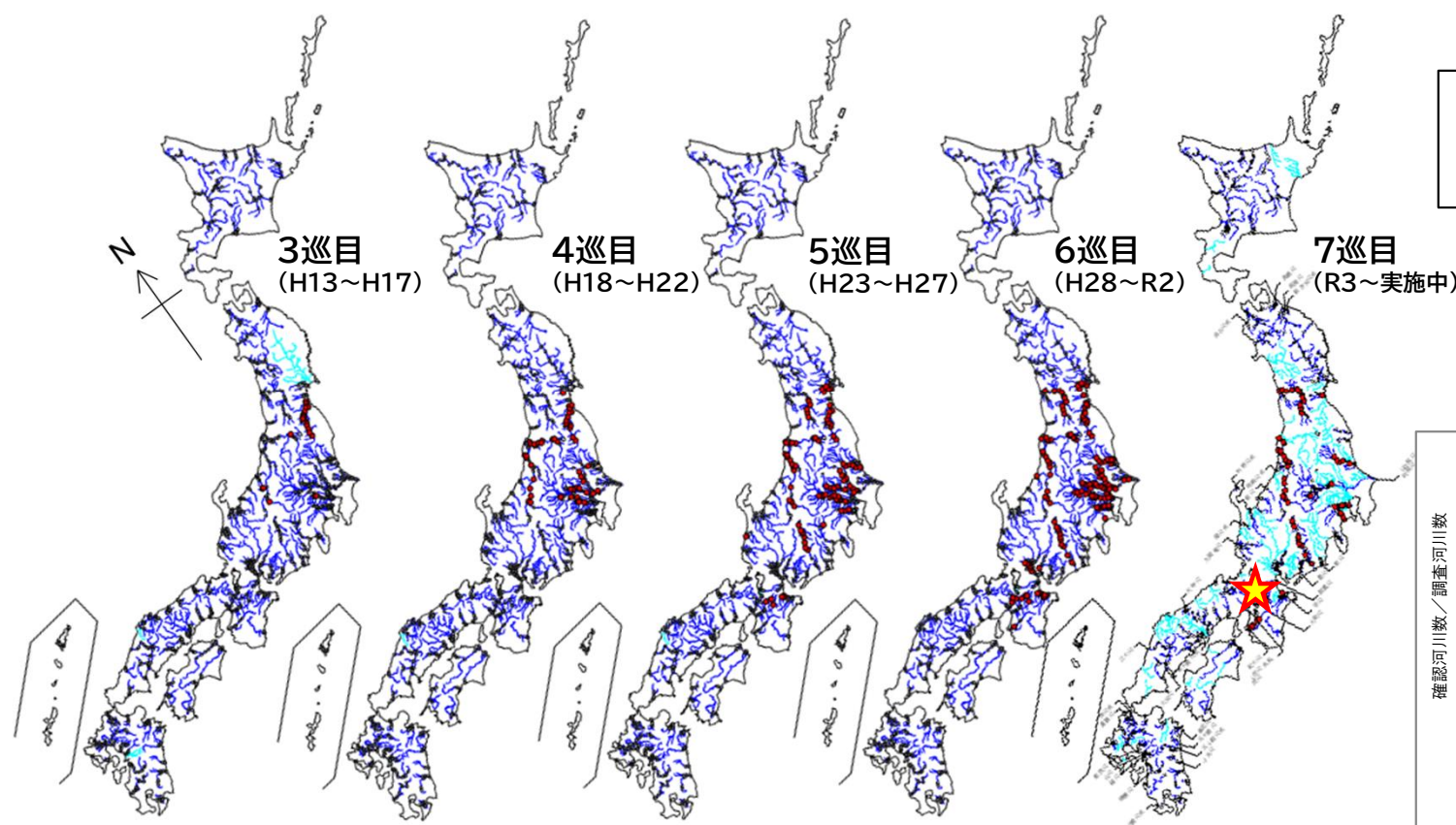
特定外来生物コクチバスの分布が、日本の河川でも**経年的に広がっています**。

コクチバスは北米原産の淡水魚で、釣りの対象として人気がある一方、在来の魚や水生昆虫との競争や捕食による影響が懸念されています。

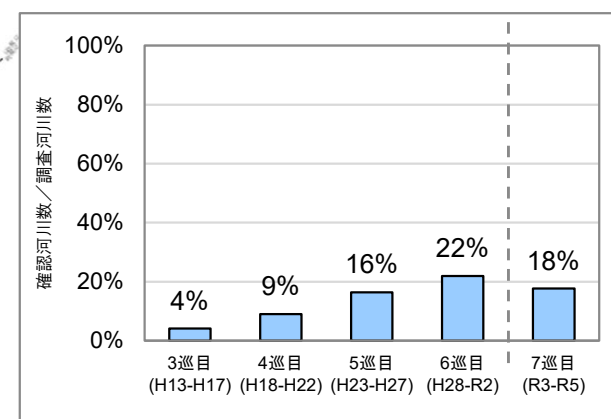
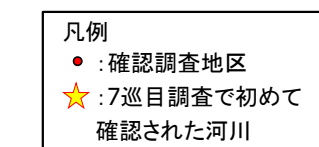
令和5年度の調査では、調査対象20河川のうち1河川(紀の川)で確認されました。また、令和4年には、淀川水系野洲川にて初めて確認され、分布拡大が続いていることが明らかとなりました。



コクチバス (紀の川 R5. 8. 9)



コクチバスの経年的な確認状況



コクチバスの確認状況の推移